和歌山のライフ

オ　スギョン
日本語・日本文化研修留学生　韓国

私は韓国出身で、２０１６年１０月から１年間、日本語・日本文化研修留学生として和歌山大学で学んでいる。２０１６年９月２７日、重たいスーツケースを持ち、大きなバックパックを背負って、関西空港に着いて、学校からもらったガイドを見ながら和歌山大学前駅に着いたのが、つい昨日のことのようだが、もうすぐ１年になる。作文コンクールのテーマが「留学生から見た和歌山」なので、留学生の私の和歌山のライフについて読んでいただきたいと思う。

私は今、和歌山大学のすぐ隣にある「エス・ティー・ワールド・レジデンス」というマンションで暮らしている。初めてここに入った時は、二人の日本人のルームメートがいたが、今は、一人が交換留学生として韓国に行っていて、一人のルームメートと二人で住んでいる。私は和歌山に来る前は、韓国の大邱（テグ）という都市に住んでいて、そのテグの小学校・中学校・高校を卒業した。それから大学もテグにある慶北大学校に進学したので、実は家族のもとを離れて生活したことが今までなかった。だから、私にとって和歌山での１年間は、日本について勉強できる機会かつ初めて家から離れて独立した生活をする機会でもあって、全てのことが自分にとっては新しく感じられた。

初めてマンションに入った日が、まだくっきりと目の前に浮かぶ。最初の日、部屋に入った時、部屋でゼミの課題をしていたルームメートが私の荷物を受け取りながら、私の部屋に案内してくれた。ずっと人が住んでいなかった部屋だったので、初めて部屋を見たときは、「なんだか寂しい部屋だな」という印象があったが、顔もしらなかった私のためきれいに掃除してくれていて、「これが日本人のおもてなしということかな」と思った。荷物を部屋に置いてから、ルームメートにキッチンやリビング、お手洗い、お風呂などを教えてもらった。部屋のあちこちにあるぬいぐるみや雑誌、キッチンの調味料など「家に人が住んでいる」という生活感が伝わってきて、新しい環境で毎日が緊張の日だった当時、家としての安定感が感じられ、帰ったらすぐに落ち着けた。

和歌山は風が強いから洗濯物を干す時は洗濯ばさみを使うこと、シンクの排水口にはあらかじめ網をかけておくこと、ペットボトルを捨てるときにはビニールを外すことなど、今は慣れてきて特に気にしないことだが、当時の私には、全てが新しくて不思議な気分だった。また、「日本人は細かいことまで気使ってくれるんだな」とも思った。顔も知らない外国人と一緒に住むようになると不安になったり、心配になったりすると思うけれど、私が日本でよく適応できるように、なんでもその都度世界で一番優しく教えてくれたルームメートのおかげで、今でも和歌山の生活の第一印象は温かく幸せな記憶として残っている。

和歌山に来てから１ヶ月間は周りの全てが挑戦で冒険だったが、その中でも一番難しかったのは和歌山のバスだ。和歌山のバス路線表は外国人の私にとってわかりにくかった。

そのため、'和歌山大学前駅'に行こうとして乗ったのに'JR 和歌山駅'に着いてしまったり、和歌山大学前駅から家へのバスを間違えて乗って途中で降りたところ、もう後のバスがなかったり、ちゃんと降りたのに行こうとした場所じゃなかったりしたことが度々あった。それにもかかわらず、私が今日まで生きてこられたのは、私が困るたびに地域の方々が助けてくれたからだ。道でどんな人に聞いても優しく教えてくれたり、自分もわからなかったらまた他の人に一緒に聞いてくれたり、夜遅い時には直ぐにタクシーを呼んでくれた。私が和歌山の地域の方から温かく良い印象を受けたのは、地域の住民一人一人が地域を代表する顔をした素敵な外交官だからだと思った。

３～４ヶ月が経ってからはもう道も迷わなかったし、自分の生活にも適応することができて、周りを見回す余裕もできた。私が一番好きなことは、家から一番近いイオンのスーパーに買い物に行くことだ。最初の１～２ヶ月間は日本に旅行来た気分でよく食堂やカフェに行ったが、それでは１年間は無理だと思って、電話で母からレシピを聞いて自分でいろいろな料理を作ってみるようになってから、スーパーに行くことが好きになった。スーパーに行くと、ここ和歌山に住んでいる人たちは何を買うのか何を食べるのかが見えて面白い。日本のスーパーではいわゆる'健康食品'が多くて、日本が長寿国家ということが納得できる。

例えば、大きい冷蔵ケースの一台が全部いろいろな豆腐だったり、その向かいの冷蔵ケースには納豆と梅干しがあったり、トマトもいつも赤くて美味しそうな状態で並んでいる。それだけでなく、種類や部位、調理方法によっていろいろな肉や魚もあるし、多様な野菜や果物もすごく新鮮で、少しずつ買うこともできるので、いつも買い物が楽しい。特に、私は和歌山に来る前まで、みかん・ポンカン・イヨカン・キンカンなどこんなに多くの「カン」をみたことがなかった。また「デコポン・はっさく・はるみ・せとか」など「カン」と同じような見た目の果物もたくさんあってびっくりした。ある日はそれらの味が気になって一個ずつ買ったことがあった。しかし、家に帰って袋を開けてみると、どれがどれだか区別がつかず、結局それぞれがどの味なのかはまだわからない。

作文コンクールの文を書くため、１年前からの写真を振り返ってみた。和歌山の静かなバスの雰囲気、村に鳴り渡る５時のチャイム、市役所のあたりのお風呂に行って帰って来るときに見える和歌山城、イオンのスーパーの火曜日のセールの歌など、まだ２ヶ月以上残っているのにもう懐かしくなる気がする。地元の大邱から離れ和歌山に住んでみて思うことは、違うところも多いし、同じところも多いということだ。違うところも同じところも、全てが面白かったが、違っても怖くなく、同じこ

とでも退屈しなかったことは和歌山に住んでいながら会った周りの人々のおかげであって、みんなにすごく感謝したいと思っている。いつかは私がもらって感じた温かさを、他の人にも伝えたい。